

第21期第14回常任理事会議事録

日時 昭和56年10月19日(月) 9.45~12.30
場所 東京管区気象台第二会議室
出席者 岸保, 小平, 浅井, 荒井, 内田, 河村, 黒木, 杉村, 竹内, 二宮, 松本, 増田, 村山

報告

〔奨励金 各賞〕 人体への落雷研究グループ代表北川信一郎会
員から、「人体への落雷の研究」について朝
日賞推薦票の提出があり、理事長の承諾を得
て学会として推薦した。

議題

1. 昭和57年度予算(案)について
荒井理事からさきの予算(案)を修正した部分に
ついて次のとおり説明があった。

- (1) 前回の常任理事会で問題になった「気象集誌」の
特別号が56年度発行となるため、記念事業積立金
1,050万円のうち415万円を取崩収入とした。
- (2) 光熱水料費を3万円としたが、これでは少ないこ
とがわかったので10万円に増額した。
- (3) 事業費のうち旅費交通費を、地方講演講師(外
人)の謝礼も含め増額した。
- (4) 事業費の印刷製本費の2%値上り分は、「気象集
誌」の予定頁数の増加のため取りやめた。
- (5) 予備費のうち記念事業に53万円、一般に22万円、
計75万円とした。これに対し、記念事業費を特別
会計にしないと決算書などに問題があるのではな
いかとの意見が出され、原案でも特に問題となる
ことはないと思われるが、再検討することになっ
た。

また、記念講演の謝礼がなお少ないことに関し
ては、記念事業を総合的に討論する際検討する。

2. 昭和56年度奨励金受領候補者推薦について

竹内理事から、9月25日に行われた選考委員会の
結果の報告が次のとおりあった。

- (1) 今年は応募件数が少なく、4件のうちから内容的
に見て次の2件にせざるを得なかった。

細野正俊 会員(愛知県稲沢市立高御堂小学校)
環境教育への気候学的アプローチ—愛知の気
候環境—

西本洋相 会員(高松地方気象台)

海上における霧の予報

以上2件について、全理事に対し可否を投票し

てもらったことになった。なお、応募数をふやすこ
とに対しては、その方法等を委員会で検討するこ
とにした。

3. 100周年記念事業について

- (1) 「天気」「気象集誌」の増刷について

「天気」は4月特別号を400部増刷して新入会員
および記念事業招待者などへの頒布用としたい。

「気象集誌」は、Vol. 60-1号が特別号となる
が、「天気」の11月号に予約募集の記事を掲載す
る。投稿者には寄贈し、予備は100部としたい。

- (2) Technical Conference の準備委員会の設置につ
いて

委員長 岸保 理事長

委員 片山 昭, 相原正彦, 村山信彦, 村上
勝人, 小平信彦, 荒井 康

以上のメンバーにより早急に委員会を開いて準
備を進めることが了承された。

- (3) 記念式典招待者について

事務局(案)を全国理事会に提案する。

- (4) 記念講演者の選定について

ア. シルクロードの気象に関して、NHK に下交
渉したところ、引き受けてくれそうである。

イ. もう1人の柳田邦男氏には、なかなか連絡が
つかない。

4. その他

- (1) 水資源シンポジウムの分担金について

来年8月、6学協会共済と水の週間実行委員会
の7団体で開催することとなるが、20万円の分担
金を支出する予定について了承された。

- (2) 山本賞の委員について

担当理事 二宮洗三

委員 時岡達志, 近藤純正, 金光正郎, 小
野 晃, 会田 勝, 以上「気象集
誌」関係

坂上 務, 杉村行勇, 内田英治, 嘉
納宗靖, 廣田 勇, 以上「天気」関
係

- (3) 「気象研究ノート」の委員の交代について

(新) 田平耕治, (旧) 足立 崇

(新) 住 明正, (旧) 北出武夫

(34頁に続く)



佐尾和夫 著

空電

成山堂書店, 1981年7月刊,

A 5判, 151頁, 2,200円

空電という言葉が日常会話に使われることはまずないといつてよい。本書もこの点を考慮して「雷の電波ふく射をめぐって」というサブタイトルがつけられている。空電とは何かという点では、地球物理の研究分野が超高層へ急速に広がったことに関連して、当初の無線通信妨害雑音という発想から若干の拡張があることも事実で、空電をひろく自然界の電磁現象とする解釈もなされている。しかし本書の内容は本来の意味での空電、つまり雷放電からの放射電磁波に限られている。「序」に述べられているように、空電をもっぱら取扱った邦書の刊行は戦後はじめてのことであり、この方面に関心をもつものにとって、手もとに置きたい一書であるといえよう。

第1章「概観」では空電研究の目的、歴史的背景、将来への展望が語られる。第2章「雷の性質と空電の放射」の主題は、雷放電にともなう電磁波発生メカニズムである。光学的な観測手段は直接われわれの視覚にうったえるだけにその成果はきわめて分りやすいが、近距離空電の受信は、その大部分を雲にかくされた雷の全体像をつかむのに多くの情報をもたらしてくれるのである。台風、竜巻等の気象擾乱にともなう空電、雷雨活動におよぼす太陽、月の影響も、簡単ではあるが紹介されている。第3章「空電観測法」、第4章「空電発生地点の位置決定法」は、空電の受信によって遠隔地点の発雷

位置を知る方法、およびこれに附随する諸問題が論じられる。衛星が雲の写真を刻々に送ってくる現在、多点で空電の到来方位をはかり、その交点として発雷位置を求める方法には、気象現況を知る上での実用的価値はあまり無いが、実はこれが戦中戦後において気象擾乱リモートセンシングの唯一の手段であったことを思い出し、郷愁を感じる人も少なくないであろう。

第5章「VLF 空電」は遠距離空電の主体である10 kHz 帯の伝搬の理論と多くの観測例をあげる。第6章「ELF 空電」は著者がもっとも専門とした分野である。シューマン共振現象は電離層と大地間の電波の球殻共振現象であり、これを励起するのは個々の雷からの放射であるにしても、観測されるのは全地球上の雷活動の集積である。この意味では、全雷活動効果のいわば直流成分と見ることのできる空地電流や晴天静電場につながるものである。通信に対する空電防衛を論ずるには、第7章「空電雑音の統計的性質」が重要である。第8章「地殻の電氣的性質と地殻導波管」では、空電を地殻の探査に利用する可能性についての著者の年来の提案が述べられている。

本書はいわゆる一般解説書ではないが、できるだけ数式を省き平易な叙述がなされているので、予備知識がなくても比較的容易に読み進むことができよう。各章に取り上げられた内容の取捨選択は、それぞれの専門家の立場からみれば異論もあろうが、全体としてまとまりをもった好著で、雷とその放射電波に興味をもたれる方に、是非一読していただきたい。

(高木増美)

(5頁より続く)

以上、(2)、(3)の2件について了承された。

(4) 第22回(昭和56年度)東レ科学技術研究助成候補者の推薦について

名古屋大学空電研究所教授 高木増美氏ほか5名の共同研究による“中高緯度地帯における成層圏オゾン層とエアロゾル層の変動に関する研究”について推薦した。

(5) 第1回国際シンポジウム(地球資源と宇宙時代)の協賛について

日本リモートセンシング学会から依頼の上記の件については協賛とすることが了承された。

承認事項 藤田由紀夫ほか12名の新入会員を承認。